

# 長距離歩行行事の意義について

## Significance of long-distance walk event in junior high school

浅 尾 秀 樹  
Hideki ASAO

### 1. はじめに

昨今の教育事情から、教育の質と教員の力量が問われ、さらにそのための教育養成課程の充実が求められている。学校教育課程の両輪として「教科教育」と「特別活動」があげられるが、「特別活動」が教員養成科目の必須科目と位置付けられたのは、平成に入ってから教育職員免許法改正以降のことである。それまでは目的や方法において、ある意味で過去の踏襲のまま継続・軽視されてきた危うさは否めない。この点については学校教育、指導法の中にもそうしたものが潜んでいることに無自覚である危険性があり、当然と思うことにこそ再度の確認が必要ともいえるのである。

学習指導要領の改訂（1977）では、「特別活動に学校の創意工夫を生かした充実が求められた」とともに、「自主的・実践的な態度の育成」が強調された。さらに今日、「特別活動の現状と課題、改善の方向性」（中教審、初等中等教育分科会教育課程部会第47回）では、「情報化、都市化、少子高齢化などの社会状況の変化を背景に、生活体験の不足や人間関係の希薄化、集団のために働く意欲や生活上の諸問題を話し合っ解決する力の不足、規範意識の低下などが顕著になっており、好ましい人間関係を築けないことや、望ましい集団活動を通じた社会性の育成が不十分な状況」と指摘し、特別活動における「活動を通して何を育てるか明確でない」との指摘もある。さらに、体験活動の推進として「学校の特色を生かし」「生きること、働くことの尊さ」を重視するものの例示がされ、望ましい人間関係を築く力や社会的スキルを身につけることが重視されている。これらは学校教育全体をとおして推進されるものであり、教科教育はもちろんのこと、特別活動において果たす役割はますます大きなものである。

そこで本研究においては、特別活動の中でも遠足や体育的行事について考察し、その方法として中学校で取り組まれた長距離歩行行事の取り組みについて検討する。

### 2. 長距離遠足について

K 中学校は北海道の後志支庁所在地に位置する中学校で、地域的には羊蹄山麓に位置する。昭和54年に生徒数・学級数増により2校に新設することから、特色ある校風・教育内容・方法について求められ、特別活動の一つとして遠足行事の新たな取組みが試みられた。これまでの

遠足行事は、学校から数キロ離れた公園等に集団徒歩、現地での自由活動、昼食、集団徒歩により帰校・解散という内容であった。これを大胆に地域のシンボルである羊蹄山を一周する遠足行事に変更しようとの試みであった。これまでの隊列型歩行を手段とする遠足から、8時間の制限時間で45kmを歩き抜くこととして、一人ひとりが自分と向き合いながらこの目標を達成させることを一つの試練としたわけである。(注1)

行事名を「耐久遠足」とし、実現に向けた準備をはじめた。目標を、①耐久遠足を通して“ねばり”“ふんばり”“がんばり”の精神を培う、②苦労してことを成しとげた満足感や喜びを体験させる、③自己の体力の限界を理解し、体力に対する関心を高めることの3点とした。実施日は秋の神社祭の前日とし、翌日が疲労回復できるように配慮した。さらに、生徒・父母・教員の理解を得るため、また、一大学校行事として達成感を体得させるには、そのための基礎的能力を育成するための体育科指導内容が裏打ちされていなければならないので、目標達成年を3年後の昭和56年度とした。特に自己の体力を考慮して一日で歩ききるための計画見通しを立てる基礎的能力の育成には教科体育が最も関与するわけである。それまでの経過段階では、初年度の昭和54年度は中学校からNHスキー場を経由する一周21.4kmのコースで実施し、2年次には隣のN町まで距離をのばして34kmとし、3年次に最終目標である羊蹄山一周45kmを完歩するものとした。第3回で迎えた完成年度には、目標項目の②に「羊蹄山一周を目標に」、さらに④には「生徒・親・教師が共同して参加・協力し合い、ふれ合いを深める」の項目が追加された。(注2)

この計画では、昭和7年北海道庁立野付牛中学校の鉄道沿線強行遠足により開始された歴史をもつ北海道北見北斗高等学校の「第46回強行遠足要項」と「昭和50年度強行遠足のしおり」を参考に実施要項を作成した。北見北斗高等学校の強行遠足では、「生徒の体力向上、不撓不屈の精神の高揚、友情を各自の能力の自覚を通じて、それぞれ有効に発揮せしめる」をめざし、スローガンである「いつもでない一日」は、学校行事の「非日常的」特性を的確に表現している。(注3)

K中学校の教育目標は昭和28年に「力のある人」と設定され、その後27年が経過した時点で、社会の変遷や教育政策の転換に対応し昭和56年に教育目標を改訂することとなった。新教育目標においても総括目標は「力のある人」で変えることなく継続し、「力」についての内容的な変化には基本目標の中で対応するとした。つまり、旧目標の「どうしてなんだろうと考える人」「もっとよくなる方法はないだろうか考える人」「はたらく人」「協力する人」の、1～3までは変えずに、4の「協力する人」を「心のみがき、はげましあう人」「からだをきたえ、きびしさにうちかつ人」の2つにしてより鮮明にし、これに対応するものとして、この耐久遠足が位置づけられた。

学校行事は総合的であることと、そして、非日常的であることに行事としての存在意義がある(中野目1996)。この非日常に相当するものとして、1日8時間で45kmを耐えて完歩することを目標とし、主体的に取組み、達成させることを課題としたわけである。いずれの学校にお

いても、学校の特色を生み出しているのが学校行事をはじめとする特別活動であり、特に学校行事では「その学校の文化的特色や校風を集約・反映され」、「質の高い学校文化を創造し、すぐれた校風や伝統をつくる」（山口1990）ことができるからである。

### 3. 長距離歩行行事の意義

この学校行事のねらいは、自己の体力の限界を知り、見通しをもって目標を達成する能力を育成することを目指している。こうした能力は・態度は、学校行事一日で達成されるものではなく、日常の教育活動全体を通して形成されていくことである。

通常の遠足は集団歩行を目的としてはいない。学校から離れた目的地での活動（例えば写生、スポーツレク等）のために移動するための手段である。けれども、この耐久遠足は手段としての活動ではなく、歩行そのものが目的であり方法とすることにより、貴重な体験の学習活動とすることができる。つまり「なすことによって学ぶ」（learning by doing）のであり、ときには「失敗の経験」ですら、人間形成にとって有意義な体験とするプログラムが成立するのである。

集団で道路を歩行するのであるから、安全管理の上から隊列をなすことが必須と思われる一方、次のような記述もある。遠足は学校行事の一つの「旅行・集団宿泊的行事」で、具体的には遠足、修学旅行、集団宿泊、野外活動などが含まれる。ちなみに修学旅行は明治19年に東京師範学校の「長途遠足」に始まるといわれ、小学校などへは鉄道網の整備につれ大正期に入って広く普及し、伊勢神宮への参拝旅行が多かった（宮崎ら1993）。そののちもいわゆる修学旅行は神社仏閣参拝を主とするものが長く続いたが、こうした旅行行事の目的と方法の見直しが行われてきた。また、遠足はもともと初期の運動会が近隣の学校が共同して開催する連合方式をとっていたことから、「その連合運動会に参加するために会場までの徒歩による隊列行進していた」（大石1991）、あるいは「運動遠足時代には、隊伍を組み、威風堂々と軍歌を斉唱しつつ行進するという行軍としての性格が強かった」という時代もあった。その後、次第に運動会が一校単位で行う方式に移行するのに伴い、独立した学校行事になっていったことから、そうした性格はしだいに弱められ、見学や実地学習を主体とする校外学習としての意味をもつようになった（山口1990）。つまり遠足は主たる活動のための手段として行われており、隊列を組み集団歩行することが多かったわけである。遠足行事は、前述のように特別活動の「旅行・集団宿泊的行事」に包括される。つまり「平素と異なる生活環境にあつて、見聞を広め、自然や文化などに親しむとともに、集団活動の在り方や公衆道徳などについての望ましい体験を積むことができるような活動を行う」とされている。

一方、健康安全・体育的行事としての視点では、いわゆる「マラソン大会」としての取組例もある。設定された距離を走り抜く速さと順位を競う、さらには順位を得点化し学級対抗とすることなども行われた。これらは、「心身の健全な発達や健康の保持増進などについての理解

を深め、安全な行動や規律ある集団行動の体得、運動に親しむ態度の育成、責任感や連帯感の涵養、体力の向上などに資するような活動」を意図して行われることから、実施には様々な工夫と配慮が求められている。(注4)

こうした速さや順位を競うものではなく、自由歩行という様式ではあるけれども目標達成までの過程に歩行そのものが苦痛となり、しかし気力を発揮すれば歩行の継続が可能となるプログラムなのである。この中には、「思考、判断、改善、試行、努力」がゆっくりとした時間の経過のもとで進行し、最後に「達成感」を味わう体験として記憶されていくのである。このことから、遠足行事の方式ながら体育的行事の要素もとりこみつつ、他の教育活動とは重複しない教育的効果が期待できるのである。

この学校行事を体験したのち、30数年が経過して、成人になってからの振り返りとして、アンケート調査をもとにインタビューと感想文の集約を行った。その中では、耐久遠足のことを「よく思い出す」「ときどき思い出す」ことがあり、「自分の子どもや今の子どもたちに同様の体験をさせた方がよい」との回答を多数得た。(注5)

さらに、長年K中学校の近くでの学習塾経営者からは、「塾生として2校に新設された両方の中学から来ているけれども、耐久遠足を経験したK中学生は、一言では言えないけれども変わる。自立心が育っていることを実感している」との回答があった。

感想文の一例では、「…中間点あたりで、りんごやなしをいただきましたよね。あれはおいしかった。自分は午後2時台にゴールに帰ってきていたと思います。ただ、ゴール地点の歩道に座ったら最後、立ち上がれませんでした。帰宅して疲れて泥のように寝ていたような…。

(中略) その後の人生で何か役立ったかとなるとなんと微妙ではありますが、客観的に無理と思われても、実際にやってみると何とかできるかもしれないという思考回路が自分の中にあるようで、実際にやってみると何とかできることも少なくありません。そういう思考の根底に、中学生がフルマラソンの距離を歩くことは可能だし、自分もそういう経験をしたというのがあるのかもしれない(40歳代男性)」などが、特筆できる。

特別活動の到達点は「自主的・実践的態度の育成」であり、「望ましい集団活動を通して」「集団の一員としての自覚を深め、協力してより良い生活を築こうとする」ことであり、そのために自分のおかれている状況を判断し、自己の責任において判断し、目標を達成することを一日で完結する体験プログラムとしたのである。特別活動は「為すことによって学ぶ」、つまり、経験を通して学ぶといわれる。個性を生かす教育の充実が求められるけれども、そのためには主体的に活動する意欲を喚起することなくして達成できない。自主的・実践的学びの前提となるのが情緒的感動であると言われる。すなわち客観的なことから主観的に意識し、積極的に課題に取り組もうとする意欲が生まれてくる(山口1990)。そして自主的な体験を通して知的探究心、創造力・忍耐力を育むことができ、いわゆる学び方を修得する。学校教育として特別活動が人格形成に大きな役割をはたすことができるのである。

(注1) 地域的特色ある行事としては、スキーの町であることを生かした「歩くスキー遠足」についても特筆できる。内容はニセコにあるワイススキー場リフトの最上部から隣の尾根に移動し、そこからゲレンデではない未整地の山斜面を歩くスキーで学校まで戻るというものである。3月上旬に公立高校の入学試験が終わって、卒業記念として3学年全員が約13kmを下山するというものである。天候に恵まれ、全員が記念すべき完走を果たすことができた。全町から3学年全員の用具を集めるなどの準備等の苦労は相当なものがあり、残念ながら1回の実施を見たが継続はされず伝統行事とはならなかった。

(注2) なお、1回目と2回目は距離は同じであったが、3回目の羊蹄山一周を目標とするのは2・3年生の男子とし、1学年の男子はスタート地、点までバスで運び7.2km短縮し、女子のスタート地点は同様に13.2kmを短縮して実施した。実施にあたってはPTA役員の協力が必須であり、交通安全と事故防止には最善の配慮をし、移動観察と通過ポイントでの健康管理をした。さらに中間点では果物1個を配給し、健康管理と激励を行った。

(注3) 北見北斗高等学校での平成26年第82回の距離は男子71km、女子41.2kmで実施された。さらに、88回の歴史をもつ山梨県立甲府第一高等学校強行遠足では、大正13年に始まり、2回目では深夜0時に学校事務室で出発の証印をもらって、24時間で歩行によりいけるところまでとし、帰路は鉄道を利用し、到達駅の駅長印を検印とする方式で行っていた。最長距離では昭和32年の167.1kmとある。平均では約80kmほどである。

(注4) 平成20年の調査では、高等学校での長距離歩行行事实施率8.8%であり、平均距離は男子 $28.9 \pm 15.8$ km、女子 $26.9 \pm 13.9$ km。マラソン行事の実施率25.4%、平均距離は男子 $10.6 \pm 5.1$ km、女子 $7.3 \pm 4.9$ km (木内2008)。

(注5) 卒業生の人脈に依拠する調査の限界が想定される。北海道新聞地方版に掲載されたが、卒業後の数十年後を当初から想定した調査ではないので、アンケート等は人づてに頼らざるをえないものとなり、回答の多くが肯定的なものであった。つまり出身校の教育を肯定的に思考する傾向の人に偏るのでそのような結果となることが推定される。また、「がまんして成しとげることは善である」の価値観が潜在化している場合は、アンケート調査の結果に天井効果がみられることは一般的である。

(注6) これをもとに32年間継続されてきたが、生徒数・学級数の減少から平成25年の統廃合を契機として、中止することとなった。

(注7) 1980年の調査で東京都、千葉県、静岡県及び山形県の中学生の回答で、1日10キロ以上歩いたことが1度もない、1回だけあるの生徒が合計35%であり、同様に雨で全身がビショぬれになったことが1度もない、1回だけあるが8.1%との報告がある。〔「モノグラフ・中学生の世界 Vol.13 中学生の生活体験 (1980)」(大石1991)〕

(注8) 指導要録との関係では、学校教育法施行規則にもとづき、児童生徒の学籍、学習、行動、出欠、健康・体力の状況などを記録し、指導に役立てるとともに外部への証明に活用するものとして指導要録がある。小中学校は平成4年に様式例が新しく示されている。その中の

「行動の記録」として項目「基本的な生活習慣」「健康・体力の向上」「自主・自立」「責任感」「創意工夫」「思いやり・協力」「生命尊重・自然愛護」「勤労・奉仕」「公正・公平」そして「公共心・公德心」がある。また、特別活動の記録欄には、「学級活動」「生徒会活動」「学校行事」について記録し、さらに次の2点について顕著な場合は○を記すこととなっている。それは、「活動の意欲：意欲をもって集団活動に参加し、熱心に自己の役割を果たした」、もう一つは、「集団への寄与：所属集団の活動の発展・向上に大いに寄与した」である。もちろん各教科の学習にもとづく評定の記載欄もあるけれども、多くの事項について「特別活動」にもとづく記載がされることとなる。

### 参考・引用文献

1. 「現代の特別活動－理論と実践－」中野目直明，小川一郎編 育英堂 1996
2. 昭和43年の教育課程審議会答申：特別活動の性格
3. 昭和52年学習指導要領改訂
4. 新訂 特別活動研究 高橋哲夫，原口盛次，井上裕吉 編 教育出版 2000
5. 特別活動と人間形成 山口満 編著 学文社 1990
6. 特別活動の理論と実践 宮崎和夫，松下静男，奥俊治，原誠治 学文社 1993
7. 特別活動の研究 大石勝男，森部英生編著 亜紀書房 1991
8. 特別活動を学ぶ 酒向健・都築亨編著 福村出版 1991
9. 佐藤秀夫 学校ことはじめ事典 小学館 1987
10. 肥田野直也 教育課程総論 戦後日本の教育改革6 東京大学出版会 1971
11. 宇留田敬一 教育学大全 特別活動論 第一法規 1984
12. 木内虹平 高等学校における長距離歩行行事の意義と運営上の問題点およびその対処法 早稲田大学 2008
13. 山梨県立甲府第一高等学校 強行遠足70回記念誌「歩け、心のかぎり」 1996
14. 宇留田敬一 特別活動指導法事典 明治図書 1984
15. 文部省 生徒指導の手引（改訂版） 大蔵省印刷局 1990

### 謝辞

本研究に協力いただいた倶知安町立倶知安中学校卒業生のご健康とご活躍を祈念いたします。また、特色ある特別活動の共同研究者として元倶知安中学校教諭鈴木昂氏の功績と、事後のアンケート調査でのご協力に感謝申し上げます。